

キルケゴールにおける伝達の二重性

伊 藤 潔 志

はじめに

I 著作の二重性

(1) 二重性の形式

(2) 著作の二重性

II 伝達の二重性

(1) 二重性の類型

(2) 二重性の実相

おわりに

はじめに

本稿は、キルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855)¹⁾ の伝達理論における直接伝達 (den ligefremme Meddelse) の意義を解明するため、その準備的考察としてキルケゴールの著作の構造から伝達の特徴を明らかにすることを目的とする。キルケゴールの思想を教育学的に考察していく際、これまで注目されてきたのは、仮名形式というキルケゴール独特の著作形式であった。この著作形式は、間接伝達 (den indirecte Meddelse) と呼ばれる。キルケゴールが間接伝達を採用した理由は、伝達内容、すなわちキルケゴールが考えた真理の性格に由来する。キルケゴールの著作活動の目的は、「いかにしてキリスト者になるか」を伝達することであり、また読者にこの課題に取り組ませることであった。

キルケゴールにおいてキリスト教の問題は主体性 (Subjektivitet) の問題であり、キルケゴールにとって最も重要な課題は主体的真理の獲得であった。キルケゴールは、ギーレライエ (Gilleleje) を旅行した際の日誌で、次のように言っている。

1) 本稿でキルケゴールの著作は *Søren Kierkegaards Samlede Værker*, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, Gyldengal, København, 1962-1964. (『全集第三版』, 略号 SV 3) を使用し、引用は略号の後に巻数と頁数を示した。日記・遺稿は *Søren Kierkegaards Papirer*, udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, 2, udg. ved Niels Thulstrup, København, 1968-1978. (『日記・遺稿集第二版』, 略号 Pap.) を使用し、引用は略号の後に巻数と整理番号とを示した。

なお訳出にあたっては、*Søren Kierkegaards Gesammelte Werke*, E. Hirsch und H. Gerdes, hrsg., Eugen Diederichs Verlag, Dusserdorf und Köln, 1950ff. (『独訳全集第三版』), 梶田啓三郎全訳『キルケゴール全集』筑摩書房, 1962~1975年, 『キルケゴール著作集』白水社, 1963~68年, 大谷長監修『原典訳記念版キルケゴール著作全集』創言社, 1988~2011年, 飯島宗享編『キルケゴール講話・遺稿集』理想社, 1964~1983年を参考にした。

キーワード：直接伝達, 間接伝達, 実名著作, 仮名著作, 二重性

私にとって真理 (Sandheden) であるような真理を発見し、…… [中略] ……私がそれのために生きそして死ぬことを願うような理念 (Idee) を発見することが、必要なのだ²⁾。

キルケゴールは、これを読者にも伝達しようとした。キルケゴールの仮名著作は読者に主体性を伝達するためのものであり、仮名形式とは読者の主体性を損なわないための伝達方法だったのである。したがって、キルケゴールにおける主体性の思想は、キルケゴールの思想を特徴づけるに止まらず、その伝達方法をも規定していたと言える。

そのためキルケゴールは、単独者 (hiin Enkelte) という概念に結実されていく人間の存在様態へと注意を向けさせようとした。つまり、キルケゴールはキリスト教に関する主体を問題としたのだが、この主体が単独者なのである。キルケゴールは、単独者はキリスト教との関係において真理である、と言う。

キリスト教自体こそ、単独の主体に無限の重さを置く。キリスト教はただ、彼、彼、彼とのみ入り、そして各人それぞれとも同様である³⁾。

キリスト教は、単独者に永遠の救済 (salighed) を与えようとする。それは、大勢にまとめて分配されるのではなく、そのつど一人ひとりに与えられる幸である⁴⁾。

単独者であることが真理であるとは、それぞれの単独者がキリスト教を主体的に受けとめ主体的問題にする、ということである。したがって、単独者という人生観は、「主体性が真理である」ということと密接に結びついている。

キリスト教の真理と関係するためには、単独者にならなければならない。そのため、キルケゴールの著作活動は、単独者という概念を巡って展開された。それは、単独者から単独者への伝達と言える。そして、それがデンマークでなされたため、「いかにしてキリスト者になるか」という課題は、「いかにしてキリスト教界においてキリスト者になるか」という課題になった。当時のデンマークでは、福音主義的ルター派教会が、国教として全デンマークを支配していた。つまり、デンマークという国自体が、一つの教会であった。デンマーク人たちは幼児洗礼を受け、誰もが「キリスト者」だったのである。しかしキルケゴールは、それは錯覚であり、彼らは真のキリスト者ではない、と考えた。

キリスト教界においてキリスト者だと錯覚している人々が真のキリスト者になる過程は、異教の者がキリスト者になる過程とはまったく異なる構造にある。したがって、キリスト教

2) *Pap.*, I, A-75.

3) *SV*3, 9, S. 46.

4) *SV*3, 9, S. 106.

界においてキリスト教の真理を伝達しキリスト者にするためには、異教徒に対する伝達とは違う方法が採られなければならない。それゆえ、キルケゴールの著作活動の目的は、キリスト教界にキリスト教を導入することだった、と言える。そしてキルケゴールは、この構造を逆説的・弁証法的なものと考え、人々にこの弁証法的運動が起こるように全著作の構造を構想したのである。

キルケゴールの全著作は、仮名著作と実名著作とに分けられる。キルケゴールの著作は、この二種類の著作群が対応し、二重性 (Dupliciteten) の構造を有している。この二重性は、単に著作を二分するだけではなく、真のキリスト者への道を示す弁証法的規定の下にある。そしてこの構造は、キリスト教界の中で真のキリスト者になるための構造と一致している。

それでは、この二重性の構造には、どんな機能があるのだろうか。異教の国で異教の者にキリスト教の真理を伝達する場合は、キリスト教の教義・知識を直接伝達するという方法が採られる。なぜなら、キリスト教の真理が知られていないからである。ところが、キリスト教界においてキリスト教の真理を伝達しキリスト者にするためには、そのキリスト教界が錯覚であること、そして自分をキリスト者だと思い込んでいることは錯覚であることに気づかせ、覚醒させなければならない。彼らにキリスト教の教義・知識を直接伝達しても、何の意義もないだろう。キリスト教の教義・知識を直接伝達するのではなく、彼らの錯覚 (思い込み) から目覚めさせるようにしなければならない。つまり、キリスト者だと錯覚している者の中に、反省を起こすものでなくてはならないのである。

キリスト教界において真のキリスト者になるには、このような反省を通じてでなければ不可能である。そのため、キリスト教の伝達は、「反省の伝達」という形を採る。人々の内に反省という精神活動が起こって初めて、キリスト教の真理と関係することが可能になる。キルケゴールにとって、この反省の伝達こそが、間接伝達である。キルケゴールは、この反省を引き起こすために、著作に二重性の構造を持たせたのである。この二重性は、反省の伝達をするための弁証法的対話関係をなしている。

キルケゴールは、この方法をソクラテス (Sokrates, 470 B. C.-399 B. C.) から学んでいる。ソクラテスは、人々を導くために自ら対話する人々の居場所 (立場) まで降りていき、そこから対話を始める。その対話は、相手自身に弁証法的・逆説的反省を促すように進められる。それによって、対話の相手を真理に導こうとするのである。それでは、キルケゴールの対話の相手、すなわちデンマークの自称キリスト者たちの居場所 (立場) はどこだろうか。それは、審美的領域にある。

キルケゴールは、審美的領域まで降りていく。そしてそこから、自称キリスト者たちとの対話を始める。ここに審美的著作の役割がある。審美的領域の者に容易に接近できる審美的著作は、錯覚からの覚醒・反省を引き起こす対話の役割を果たす。こうして審美的領域にある者は、対話を通して深い反省をし、単独者となる。このときの単独者は、もう錯覚の世界にはいない。キリスト教の真理を直接受け入れうる状態にある。ここで、キリスト教の真理

が提示されることになる。これが、宗教的著作の役割である。このように審美的著作と宗教的著作とは、弁証法的関係にあるのである。

ここで、宗教的著作の役割としての直接伝達の必要性が浮き彫りとなる。すなわち、キルケゴールの著作活動は、間接伝達だけで完結しているのではなく、間接伝達と直接伝達の両者でもって、一つの伝達を形成しているのである。キルケゴールにおいて間接伝達は、主体性の伝達として、倫理的・宗教的伝達を担っている。これには、子どもの主体性を最大限尊重した道徳教育・宗教教育の在り方が示唆されている。それに対して直接伝達そのものは、とりわけ奇異な伝達方法ではない。しかし、キルケゴールの著作全体の構造を考えた場合、直接伝達の機能を看過することはできない。そこで本稿では、間接伝達と直接伝達との関係を明らかにしていきたい。

Ⅰ 著作の二重性

(1) 二重性の形式

本節では、キルケゴールの著作の形式面から、その二重性の特質を明らかにしていく。キルケゴールは、自らの著作の二重性について、『我が著作活動について (*Om min Forfatter=Virksomhed*)』(1851年)と『我が著作活動に対する視点 (*Synspunktet for min Forfatter=Virksomhed. En ligefrem Meddelelse, Rapport til Histrien*)』(1859年)とにおいて詳述している。本稿の最後に触れるが、これらの著作においてキルケゴール自らが解説していることを、そのまま受け取ってよいかについては吟味する必要がある。だが本節では、キルケゴールの著作の二重性に一定の輪郭を与えるために、まずはこれらの著作におけるキルケゴールの説明に耳を傾けていく。

まずキルケゴールは、自らが宗教的著作家 (*religious Forfatter*) であることを強調している。そして、キルケゴールが著作活動を通して審美的著作家から宗教的著作家へと変化していったと見るのは誤りである、と言う⁵⁾。つまり、キルケゴールは最初から、すなわち審美的著作を著していたときから、宗教的著作家であったのだ、と。したがって審美的著作は、当初から宗教的著作との対応という二重性の構想の下にあったということになる。

実際、『我が著作活動に対する視点』の第一部A節では「著者が審美的著作家であるのか宗教的著作家であるのかという、著作全体における両義性、二重性」⁶⁾が、第一部B節では「著者が宗教的著作家であり、またそうであったということの説明」⁷⁾が、第二部では「著者が宗教的著作家であると理解され、この視点の下で見られた著作活動の全体」⁸⁾が論じられている。したがって、キルケゴールの著作の二重性は、キルケゴールが宗教的著作家であることが前提なのである。

5) cf., *SV* 3, 18, S. 86.

6) *SV* 3, 18, S. 85.

7) *SV* 3, 18, S. 87.

8) *SV* 3, 18, S. 93.

このことは、キルケゴールが著作活動を始めた当初からの計画であり、それゆえキルケゴールの著作のすべてがこの二重性の下にあると指摘している。たとえば、キルケゴールの初期の著作である『あれか、これか (*Enten-Eller*)』(第一版, 1843年)であれば、『二つの建德的講話 (*To opbyggelige Taler, 1843*)』(1843年)と対応し、二重性を形成している。したがって、『あれか、これか』の第一部と第二部との関係にのみ注目し、そこにのみ二重性を見出すことは誤りだということになる。キルケゴールは、次のように言っている。

より深い意味での二重性、すなわち全著作の意味での二重性は、当時語られたような二重性、つまり『あれか、これか』の第一部と第二部ということでは決してない。そうではなく二重性とは、『あれか、これか』と『二つの建德的講話』である⁹⁾。

同時にキルケゴールは、『我が著作活動の視点』が執筆された時点における著作においても二重性があることを示している。それは、宗教的著作である『さまざまな精神における建德的講話 (*Opbyggelige Taler Iforskjellig Aand*)』(1847年)、『愛の業 (*Kjerlighedens Gjerninger*)』(1847年)、『キリスト教講話 (*Christelige Taler*)』(1848年)と『祖国』紙に掲載された審美的論文である「危機および一女優の生涯における一つの危機 (*Krisen og en Krise i en Skuespillerindes Liv*)」(1848年)である¹⁰⁾。

しかし、『あれか、これか』が人々の耳目を引いたとき、『二つの建德的講話』が人々の目に留まることはなかった。また、『さまざまな精神における建德的講話』が注目されたときも、「危機および一女優の生涯における一つの危機」の意味に気づく者はいなかった¹¹⁾。そこでキルケゴールは、著作活動の最初から最後(『我が著作活動に対する視点』が執筆された時点)まで二重性が存在していることを示したのである。

ただしキルケゴールは、審美的著作にも宗教的著作にも属さない、中間的な意義を持つ著作の存在をも指摘している。それは、『哲学的断片への非学問的あとがき (*Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift til de filosofiske Smuler*)』(1846年)である¹²⁾。この著作は、全著作の「転回点」¹³⁾にあたり、その意味で重要な著作であるが、その意義は「『問題』、すなわちキリスト者になるということ」を提出している¹⁴⁾ ことにある。したがって『哲学的断片への非学問的あとがき』は、二重性の外にあって、キルケゴールが著作に二重性を持たせることになった要因を論じていると言ってよいだろう。

9) SV3, 18, S. 86.

10) cf., SV3, 18, S. 85-86.

11) cf., SV3, 18, S. 85-86.

12) cf., SV3, 18, S. 87.

13) SV3, 18, S. 87.

14) SV3, 18, S. 106.

(2) 著作の二重性

それでは、キルケゴールの著作が具体的にどのような対応関係にあるだろうか。上述のキルケゴールの説明は、『我が著作活動に対する視点』におけるものである。したがって、それ以降の著作にも同様の二重性があるのかについては、少なくとも『我が著作活動に対する視点』は保証していない。

しかし、大谷愛人によれば、キルケゴールの全著作活動を観察するならば『我が著作活動に対する視点』以降の著作にも二重性が設定されていることが分かるという¹⁵⁾。それは、キルケゴールにおける間接伝達に関する理論の形成史から傍証される。すなわち、『我が著作活動に対する視点』は上述の二重性を説明することを通して間接伝達の理論を述べているのであるが、それを通してキルケゴール自身も間接伝達の意味を自覚していると考えられるのである¹⁶⁾。

間接伝達についてキルケゴールは、『我が著作活動について』と『我が著作活動に対する視点』とが執筆される前にも、『哲学的断片への非学問的あとがき』と草稿「倫理的伝達の弁証法と倫理—宗教的伝達の弁証法 (Den ethiske og den ethisk-religieuse Meddeleleses Dialektik)」(1847年)とにおいて論じている。そして、『我が著作活動に対する視点』脱稿後も、「武装せる中立 (Den bevæbnede Neutralitet)」(1849年)と『キリスト教への修練 (Indøvelse i Christendom)』(1850年)において間接伝達を論じている。したがって、著作に二重性を持たせることを前提とする間接伝達の構想は、『我が著作活動に対する視点』以降も継続されていたと考えられる。また、『我が著作活動に対する視点』は当初からキルケゴールの死後に出版されることが予定されており、キルケゴールが『我が著作活動に対する視点』で明らかにしている著作の構想はその後も継続していたと考えてよいだろう。

こうした事実を踏まえ、マランチュク (Gregor Malantschuk, 1902-1978)¹⁷⁾、大谷愛人¹⁸⁾、中里巧¹⁹⁾の所論を参照しながらキルケゴールの著作を整理すると、次の表1～4のようになる。

ここで四つの時期に区分したのは、著作の二重性にもいくつかの類型があることが認められるからである。そこで次節では、上記の表に沿って著作の二重性の類型を分け、その構造を明らかにしていこう。

15) 大谷愛人『キルケゴール著作活動の研究 (後篇) ——全著作構造の解明——』勁草書房、1991年、386頁参照。

16) 前掲書、428頁参照。

17) マランチュク (大谷長訳)『キルケゴールの弁証法と実存』東方出版、1984年、11～16頁参照。

18) 大谷愛人、前掲書、1286～1290頁参照。

19) 中里巧『キルケゴールとその思想風土』創文社、1994年、86～92頁、註64～65頁、付録32～34頁参照。

表1 キルケゴールの前期著作の二重性

仮名著作（審美的著作）	実名著作（宗教的著作）
『あれか、これか』（第一版、1843年）	『二つの建徳的講話』（1843年）
『おそれとおののき』（1843年） 『反復』（1843年）	『三つの建徳的講話』（1843年） 『四つの建徳的講話』（1843年）
『哲学的断片』（1844年） 『不安の概念』（1844年） 『序言』（1844年）	『二つの建徳的講話』（1844年） 『三つの建徳的講話』（1844年） 『四つの建徳的講話』（1844年）
『人生行路の諸段階』（1845年）	『想定された機会における三つの建徳的講話』（1845年）

表2 キルケゴールの中期著作の二重性

仮名著作	実名著作
『哲学的断片への非学問的あとがき』（1846年）	『文学評論』（1846年）

表3 キルケゴールの後期著作の二重性

仮名著作	実名著作
『危機および一女優の生涯における一つの危機』（1848年）	『さまざまな精神における建徳的講話』（1847年） 『愛の業』（1847年） 『キリスト教講話』（1848年）
『あれか、これか』（第二版、1849年）	『我が著作活動に対する視点』（1859年） ²⁰⁾ 『野の百合と空と鳥』（1849年）
『倫理・宗教的二小篇』（1849年）	『アドラーの書』（1847年）
『死に至る病』（1849年） 『キリスト教への修練』（1850年）	『「大祭司」・「収税人」・「罪ある女」—金曜日の聖餐式における三つの講話』（1849年） 『一つの建徳的講話』（1850年）
『我が著作活動について』（1851年）	『金曜日の聖餐式における二つの講話』（1851年）

表4 キルケゴールの末期著作の二重性

教会攻撃	純宗教的著作
『キリスト教への修練』（第二版、1855年） 『これは言っておかなければならない、だからここで言うしておく』（1855年） 『キリスト教は国家公認のキリスト教についてどのように裁き給うか』（1855年） 『瞬間』第1～9号（1855年）	『神の不変性—一つの講話—』（1855年）

II 伝達の二重性

(1) 二重性の類型

① 前期著作と後期著作

キルケゴールの前期著作活動は、1843～1845年である。著作の二重性とは、仮名著作と実名著作との二重性を指すのであるが、この時期における仮名著作は審美的著作であり、実名著作は宗教的著作である。たとえば、『あれか、これか』（第一版）には1843年の『二つの建德的講話』が、『おそれとおののき (*Frygt og Bæven*)』（1843年）には『三つの建德的講話 (*Tre opbyggelige Taler, 1843*)』（1843年）が対応している。

キルケゴールの中期著作活動は、1846年である。『哲学的断片への非学問的あとがき』の役割について、キルケゴールは次のように言っている。

私が書くもの〔『哲学的断片への非学問的あとがき』〕は、それが撤回される (*Tibagekaldt*) という仕方において、つまり、その書は一つの結論を持っているが、そればかりではなく、それに加えて撤回という運動 (*Tibagekaldelse*) をも持っているという仕方ですべてが理解されるべきだという知らせを同時に含んでいる。そこでは、それ以上のことを、前にも後にも望むことはできない²⁰⁾。

すなわち『哲学的断片への非学問的あとがき』は、前期著作における仮名著作と実名著作の二重性を弁証法的に撤回する機能を果たし、その意味で後期著作への「転回点」になっている。

後期著作は、1847～1851年である。後期著作は、純宗教的著作と言ってよい。前期著作は審美的著作と宗教的著作からなっているが、そこでは審美的著作と宗教的著作とが二重性を形成しているのだから、その二重性は広い意味での審美的段階に属する²²⁾。それゆえ『哲学的断片への非学問的あとがき』において、弁証法的に撤回される必要があったのである。その『哲学的断片への非学問的あとがき』を経た後期著作においては、前期著作とは異なる二重性が認められる。それまでの仮名著者は、キルケゴールより低い段階にあり、読者の下まで降りていく役割を果たしていた。それに対して『死に至る病 (*Sygdommen til Døden*)』（1849年）や『キリスト教への修練』の仮名著者であるアンティ・クリマクスは、キルケゴールより高次の人格である。その意味で後期著作は、全体としては純宗教的著作からなり、その中で二重性を形成している。このように著作の二重性にも、前期と後期とでは違いがある。

20) 『我が著作活動に対する視点』は死後出版されたが、執筆は1848年にされている。

21) SV3, 10, S. 280.

22) 大谷愛人、前掲書、736頁参照。

② 微視的二重性と巨視的二重性

上で見た著作の二重性を巨視的二重性と呼ぶなら、それとは区別される微視的二重性も見られる。巨視的二重性とは、キルケゴールの著作をそれぞれの時期における仮名著作と実名著作との対応において見られる二重性であり、それによってキルケゴールは伝達の意図を実現しようとしていた。それに対して、微視的二重性とは個別の著作同士の対応において見られる二重性である。

具体的には、次の著作間において二重性が認められる。すなわち、『あれか、これか』の第一部と第二部、『おそれとおののき』と『反復 (Gjentagelesen)』(1843年)、『哲学的断片 (Philosophiske Smuler)』(1844年)と『不安の概念 (Begrebet Angst)』(1844年)、『死に至る病』と『キリスト教への修練』などである。これらの著作間における二重性は、常に「あれか、これか」の対応になっている。そして、新たな著作がより高次の「あれか、これか」という問題を提示している。

したがってキルケゴールの著作においては、大きな枠組みにおいては仮名著作と実名著作との巨視的二重性があり、その中に入れ子のように微視的二重性も見られるということである。それゆえキルケゴールの著作は、いくつもの二重性が組み合わさった複雑な弁証法的構造にあると言える。このとき、キルケゴールの伝達はどのように理解されるべきだろうか。次に考えていくことにしよう。

(2) 二重性の実相

上で述べたように、キルケゴールは著作に複雑な二重性を持たせていた。それでは、その二重性は、具体的にはどのように機能していたのであろうか。ここでは、最初期の著作『あれか、これか』(第一版)と1843年の『二つの建徳的講話』とを取り上げ、その一例として見ていこう。

まず、『あれか、これか』の第一部と第二部との間には、微視的二重性がある。『あれか、これか』でキルケゴールは、第一部においてはロマン主義的な審美的人生観、第二部においては敬虔主義的な倫理的人生観を描出している。ここで両者は、それぞれ上昇運動と下降運動を担っており、上昇と下降とが弁証法的運動の関係にある。ただし、この弁証法的運動によって両者の合一が目指されているわけではない。むしろ、「あれか、これか」という二者択一が迫られている。

しかし、この二者択一は、どちらも選択されることはない。実際、『あれか、これか』において、審美家Aと倫理家Bとはまったく噛み合わず、両者の対立が極限にまで際立てられている。その意味で『あれか、これか』には、救いはない。救いを提示するのは、『二つの建徳的講話』である。それによって、真の「あれか、これか」が立ち上がる。このとき『あれか、これか』と『二つの建徳的講話』との間には、巨視的二重性がある。すなわち、『あれか、これか』と『二つの建徳的講話』との「あれか、これか」が迫られるのである。

ただし、この巨視的二重性において、『二つの建徳的講話』が選択されるわけではない。そこで、『あれか、これか』第一部と第二部における微視的二重性をさらに深化させた、『おそれとおののき』と『反復』との新たな微視的二重性が提示されることになるのである。このように微視的二重性は、巨視的二重性の構造の中でさらに深い次元の微視的二重性へと深化し、また新たな巨視的二重性を構成していくのである。

お わ り に

前節までは、キルケゴールの著作活動を通して、その二重性の構造を明らかにしてきた。最後に、キルケゴールの著作の二重性を基にキルケゴールの伝達理論の構造を整理し、直接伝達の意義を明らかにして、本稿の結びとしたい。

前節までの議論からは、間接伝達には三つの層があることが分かる。仮名著作は間接伝達を担っているのであるが、仮名著作は同時に二つの二重性の下にあった。すなわち、微視的二重性にあつて仮名著作は他の仮名著作と対応していると同時に、実名著作との巨視的二重性の下にある。仮名著作はそれが仮名であることによって、一つの間接伝達を行っている。たとえば『あれか、これか』第一部であれば、ロマン主義的な審美的実存を提示している。そして、その仮名著作は他の仮名著作との微視的二重性において（『あれか、これか』第一部であれば『あれか、これか』第二部との間の微視的二重性において）、どちらも選択できないという虚無を提示している。これが、第二の間接伝達である。そして仮名著作は、実名著作との巨視的二重性において、より深化した微視的二重性・巨視的二重性へと導く。これが、第三の間接伝達である。

このように見ると、直接伝達の意義も明らかになるだろう。たしかに直接伝達それ自体は、とりたてて珍しい伝達方法ではない。これまで、キルケゴールの伝達理論が取り上げられるときは間接伝達の重要性が注目され、直接伝達が注意が向けられることは少なかった。しかし、キルケゴールにおいて直接伝達は、間接伝達と対応するための欠けてはならない要素である。前節までの議論から、巨視的二重性において直接伝達は、間接伝達と対になって、より深化した微視的二重性・巨視的二重性へと導く役割を担っている。すなわち直接伝達は、間接伝達に対置されるにとどまらず、間接伝達と併せてより大きな間接伝達を担っていると言することができる。直接伝達は、ただ単に間接伝達と対応しているだけではない。ここに、キルケゴールの伝達理論における直接伝達の意義を看取することができるのである。

さて、今後の研究課題としては、次のことが挙げられる。まず、これまで省みられることが少なかった実名著作の思想内容を、詳細に検討する必要がある。それによって、個々の実名著作がキルケゴールの著作活動においてどのような役割を果たしているのかを具体的に分析し、間接伝達における直接伝達の意義を明らかにする。その際、実名著作の著者であるキルケゴールを、仮名著作と対立する者としてのみにとらえず、仮名著作と併せキルケゴールの著作の著者たちの一人としてとらえる観点をもとりながら、キルケゴールの伝達理論の全

体像を明らかにしていきたい。

※本稿は、2015年度桃山学院大学特定個人研究費による成果の一部である。

(2017年4月28日受理)

A Study of Duality of Communication in the Works of S. Kierkegaard

ITO Kiyoshi

Among the works of S. Kierkegaard, those written under a pseudonym act as a form of indirect communication. These pseudonymous works create two dualities. The first is a microscopic duality that presents an “either-or” choice, in coordination with other works that he wrote under a pen name. The second is a macroscopic duality that encourages existential leaps, in coordination with works written under his own name. In this case, Kierkegaard’s indirect communication presents itself in three forms. His works under a pen name execute one form of indirect communication. In addition, when it comes to the microscopic duality between his pseudonymous works and those of others, it suggests nihilism in that one cannot select either. This is the second type of indirect communication. And in the macroscopic duality between the works he published under his real name and those published under a pen name, he leads us to deeper considerations. This is the third type of indirect communication.

Looking at it in this way, the significance of direct communication becomes clear. There is nothing particularly rare about direct communication itself as a method of communication. Up until now, attention has often been given to the importance of indirect communication in Kierkegaard’s communication theory, while little attention has been paid to direct communication. However, in Kierkegaard’s works, direct communication is an essential element in order to achieve coordination with indirect communication. In other words, direct communication does not merely stand in contrast to indirect communication, but rather it combines with indirect communication to allow for indirect communications in a broader framework. That is the significance of direct communication in Kierkegaard’s theory of communication.